下生者。臨終一刹那位三心開悟即往生

である。いずれにしても三心具さなければ往生はできないとし、臨終の一刹那であっても三心具して念仏すれば往生できるとするのである。

第八項　三心の一々とその関係

証空は、三心は領解の一心であると述べている。一心を開いて三心と言う。ここでは証空の考えている三心の一つひとつの心の役割について簡単にまとめてみたい。

至誠心についての証空の立場は、凡夫には真実心はないとするものである（『祕決集』巻第十六・『西全』一、三四九頁下）。その凡夫にない至誠心を証空は『蜜要決』巻第三に、『無量義経』を引いて説明する。

説四十余年未顕真実者今至誠心也何以知真者詞誠也是智恵誠也実者慈悲誠也此真実都無諸教自力也慈悲智恵誠就他力也

（『浄全』八、二八五頁上）

さらに『祕決集』巻第十六に、

四十余年未顕真実者。仏不レ説捨二此心一。担以二観経一会筵一顕二真実一而説二二心一也

（『西全』一、三五五頁上）

とある。すなわち至誠心とは智慧と慈悲の他力についての心であるとし、釈迦の顕した真実が観経にあるとする。さらに『観門義』巻第一に聖道の真実と浄土の真実を定義して浄土の真実とは、

依二観経一知二釈尊本意一。帰二大経一尋二弥陀別願一明二凡夫出離。佛利生。無レ二不レ迷意也

（『西全』三、三一八頁下）

であると言う。もっとわかりやすく端的に言えば『他筆鈔』巻上の「真実心者。捨二自力一帰二他力一心也」（『西全』五、三〇三下～四頁上）となる。

次に自利真実と利他真実を解して『蜜要決』巻第三（『浄全』八、二八五頁下）には「衆生三業願心」が自利、「就レ機真実念仏也就レ仏真実来迎也」を利他真実とする。また『祕決集』巻第十六に、

今自利真実者。上就二機方一也。利他真実者。上就二仏方一也

（『西全』三、三一八頁下）

と言う。

このように真実は凡夫になく仏にあるとする立場が明確に表れている。それでは凡夫に何があるかと言えば、『観門義』巻第一によれば、

所レ尋真実心ノ三字。共ニ属ス凡夫ニ。所レ披ル尋ネ。三字共ニ帰ス仏ニ。故ニ逢フテ比教ニ知ルノヲ其意ヲ者悉ク可シ具レ

（『西全』三、三一九頁上）

とあり、真実心を尋ねる心があるのであり、

弥陀従リ真実心ノ顕レ土導キ玉フ衆生ヲ能化真実也。凡夫。彼ノ土ハ尋ネ入リテ為ニ凡夫ノ設ケ玉ヘリトル上知ニ此謂ハレヲ所化真実也

（『西全』三、三二〇頁上）

のように、仏の真実を知ることによって、凡夫も真実になるのである。すなわち仏の本願を知る前に真実はないが、仏の真実の願を知ったあとには衆生の真実があると言う立場である。

次に深心について見れば、『他筆鈔』巻上に深心とは至誠心の深くなる心と解釈している（『西全』五、三〇九頁下）。このことを別の言葉で言えば『観門義』巻第二にある「真実心外ノニ深心トイフモ無シ別体ノ」（『西全』三、三二二頁下）となる。このように真実心と深心は同体である

とする。その理由を証空は続けて、

先真実心。既究知仏意。相応仏心。此心所帰。在仏別願。尋知別願。更可不疑。此則真実心体也。尅体故。不改真実名。直云深心也

（『西全』三、三二二頁）

と説明している。

回向発願心は、前にも述べたように三福の善を回向する大切な心である。それでは回向発願心について証空はどのような見方をしているのであろうか。『他筆鈔』巻中に次のような言葉がある。観経の意は、

離定散領解心不発。仍三福正因。三心正因。其体一也。爾回向者。以善願生彼国心也。此回向善体。云三福正因。離此回向。直願生心不可発。仍願生意。即回向也。回向即発願也。其体一。今云回向発願心等也

（『西全』五、三二六頁下）

このように回向と発願は一つの体であると解釈しているのである。さらに「今三心。心為体之故。発願為体」「離上二心。不発此心」（『西全』五、三二六頁）と言い、三心の体は発願であり、至誠心深心を離れて回向発願心は発らないとする。証空においてはこの辺りの

考え方が一見矛盾しているように考えられ、その真意を解釈するのは難しい。上述のように至誠心と深心の体と回向心と発願心の体と二つを認めているようであっても三心の体としての発願を認め、また発願は至誠心深心を離れて存在しないと言うのである。この問題についてもう少し詳しく見ると、次のような解釈が成り立つのではなかろうか。

『観経義』巻第三に、

三心悉以真実心為体。故釈深心時。謂真実深心。今釈回向時。又兼真実為体深心。云真実深信中回向也。詮聞一心為三心

（『西全』三二、三四三頁下）

とあるように、証空は真実心が三心の体であるとも考えていた。前に述べたように真実心とは衆生の持っているものではないが、仏の真実に触れることによって衆生は真実となるのである。したがって、三心は自力で得られるものではなく、仏の真実から具わるものであることが示唆される。これを証空はどう表現しているかと言えば、例えば『観経義』巻第二に、

尋入観門。知弥陀摂凡夫。相応仏心。願力尚受之。故必可生。是摂受義也。摂受故無疑。無疑云無疑。疑絶。往生心定

（『西全』三二、三三四頁上）

とあり、観門を尋ねるということがきっかけとなり三心を得ると考えられる。つまり観門に入ったあとは、真実心が体となって三心を具すると考えることができる。ここで観門を尋ねるという根本動機は何かということを考えてみると、それは求願あるいは発心にほかならないのではなかろうか。この考え方のヒントは『観門義』巻第一の第五門の解釈にある。

求願往生者。明発心故。可知発心即求願。求願即発心。此則下受法時節回向。令知説頭此求願意也。求願既三心。受法等又説述三心可意得也

（『西全』三、三一七頁下）

この文そのものは観門に入ったことを前提にしていると思われるが求願すでに三心という言葉は注目に値する。つまり求願がなければ観門に入るような発心が起こるはずもなく、したがって仏の真実に触れることもないと考えることができるのである。このように観門を知らないときは求願すなわち回向発願心が体となり、観門に入ったあとは真実心が体となると考えることができるのではないだろうか。